

Title	編集後記 奥付
Sub Title	
Author	中鉢, 正美
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1953
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.46, No.7 (1953. 7)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19530701-0085

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

てブルターニュ貴族のための謂わば城砦であつたのである。このように未だに舊態の儘を維持していたランヌ高等法院の場合には、寧ろ既に例外的なことに屬した。他の如何なる高等法院においても、一部の貴族と入替わりに、平民の出身者が迎えられたのである。例えば、デジョン高等法院においては、審議委員は大部分が平民の出身者であつた。又早くから商人の出身者を迎えたパリ高等法院については、「一五〇人の司法官のうち、半数以上が司法官という高い職に従事した家族の出身であつた。他の半数は、……富裕な商人層という比較的新しい起源を持つていた」。このような高等法院の内部においては、從來において見られた眞の共同、強い結束を再現することが固より不可能に近く、新たに商人層出身の新人を迎えたこの時期を直接の契機として、高等法院内部の結束は弛み、遂には烈しい内部的對立の發生を見るに至つた程であつた。

第十八世紀も末になつて、高等法院は、單にこのように、大商人層のなから新人を迎え入れたばかりではない。從來、高等法院の職員は、主として、分別があり技目のない老貴族に依つて構成されていた。成程、例えばツールズ高等法院においては、依然として老貴族が主たる勢力であつた。然し大多数の高等法院においては、舊制度の末期といふこの時期に、老貴族の勢力が弱体化して來ている。例えば、エクス、グルノーブルの各高等法院においては、職務の遂行に差支える程の老貴族達は、自分等の若い子弟に職を譲らなければならなかつたし、又

デジョンやパリの各高等法院においても、青年の進出は目覺しく、三十五歳以下の評議員が絶對的多数を占めるようになった程であつた。

青年貴族のこのように顯著な進出も亦、高等法院の内部に分裂を起させる有力な他の原因となつたのである。青年貴族は、「戰場に赴く如く評議員の集會に出て行つた」。そして青年貴族は、主として商人層から迎えられた新人と結んで、從來の傳統の積極的な否定者となつた。「我々は、……自分等が公共の利益と考えるものために犠牲を捧げよう。青年貴族の盛んなこの叫びは、高等法院内部における統一を妨碍し、内部的結束という唯一の基礎の上に存續し得た高等法院自體の存立をも、結局において危険に陥れることとなつたのであつた。

新人の採用、青年貴族の進出に依つて、高等法院の内部は、このように烈しく動搖した。しかも、高等法院の内部に混亂を挿込んだ新勢力は、寧ろ第三階級の意識に混入し、これを指導し、その味方となつて革命の推進力の大きな部分を擔つたのであつた。(渡邊國廣)

編集後記

幾多の曲折を経た朝鮮休戦會談も、捕虜交換問題を一轉期として次第に大詰に近づきつつあることは、熱戦擴大の危機が一應後退した安堵感を我々に與える。勿論それが國際情勢の基底にある社會經濟的病根を何等根本的に改變するものではないとしても、なお原爆戦争の恐怖とその迴避への努力とが從屬國民衆の本能的願望のみに止まるものでないことを證明するには充分であらう。廣島、長崎に實證された殘酷な死の危険は、今や國民、階級の如何を問はず、否むしろそれらの指導的位置にあるものにおいて深刻であるときえ思われる。しかもこの一日延しの解決を、より積極的な形に迄推進させるためには、各國民衆の階級を越えた結合を支えるべき生活感情の物質的基礎は未だあまりに薄弱であるとすれば、恐怖の一日の延期はその一日の生長を許し、それに一日の破局性を累積するにすぎない。

しかしこの全人類に極めて平等に課せられた死の豫告を直視するところに、二十世以後半に生きる人々の共感とそれに基く寛容の精神とが蘇えつてくる。これは一日延しの解決が許しうる限度迄民衆生活の均等と向上とを計る國際的善意として働くであらう。そしてこの限度内においてでもあれ、やがて人類の歴史がその危機を突破しえたときにおける、新たな進歩を支えるべき生活の共通の地盤を用意するであらうことを信じたいと思ふ。(中鉢正美)

昭和二十八年六月二十五日印刷	昭和二十八年七月一日發行
第四十六卷	定價 七拾圓
第七號	送料 四圓
東京港區芝三田慶大經濟學部内 編輯者 高村象平	東京港區芝三田豐岡町八 印刷所 圖書印刷株式會社 川口芳太郎
豫約購讀料 一年分 金八四〇圓(送料共) 半ヶ年分 金四二〇圓(〃)	發行所 東京港區芝三田二丁目 慶應義塾大學經濟學部研究室内 慶應義塾經濟學會